

馬場遺跡第5地点

－馬場遺跡再び－

調査課長 喜 多 裕 明

はじめに

本遺跡は平成21年度第13回遺跡発表会で発掘調査の最新の成果として紹介された後、22年度に整理作業が終了した。本発表の趣旨は、その整理作業の過程で判明した様々な成果の報告を再度行うものである。

遺跡の立地と周辺環境

馬場遺跡は、標高20m～50mの下総台地の北端に所在し、北には利根川と将監川を望む。印西市自体は全般に平坦な地形を呈しているが、本遺跡が所在する周辺はこれらの河川によって樹枝状に開析された複雑な地形を形成している。周辺の縄文時代の遺跡は、これまでまとまった集落の発見は少なく、該期の遺物は包含層、ないしは遺構外からの出土が多い。時期別に見ていくと、早期の土器が出土するのは、平台先遺跡、宗甫北遺跡、天神台遺跡、駒形北遺跡、池ノ下遺跡において撚糸文、沈線文土器が出土している。前期は宗甫北遺跡の関山期の屋外炉が唯一である。中期から後期になると集落が形成され始め、天神台遺跡では数軒の、馬込遺跡では加曾利E式から称名寺式期の竪穴住居跡が10軒以上、土坑95基の検出が認められる。晩期に入ると安行3aから3b式の土器が出土する馬場遺跡周辺と天神台遺跡のみに絞られ、遺跡分布で見ると、該期は2つの遺跡による二極化の傾向が窺える。また、本格的な調査がなされていないが、天神台貝塚からは、ヤマトシジミを主体とする貝層に貝輪や骨角製品が伴うことが知られ、馬場遺跡と様相が近い点も注意しておきたい。

縄文時代における馬場遺跡の概要について

縄文時代の遺構内容は、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟、土坑368基で構成される。土坑は検出総数の60%が縄文時代に帰属するものである。この数字だけでも本遺跡が特異な様相を示していること

が窺える。また、出土箱数約230箱の大半も該期が占めている状況である。この住居軒数に比して土坑の数と出土遺物の量が多い点、その内容も通常の縄文土器の他に、注口土器、異形台付土器を含み、土製品も耳飾、耳栓、土偶、人面付土版が、石製品に石棒、石剣、独鈷石、石冠などが出土し、おおよそ後・晩期の指標となりうる特殊な遺物が数多く出土している点などが馬場遺跡の様相を考察するうえで重要な鍵と考えられる。

馬場遺跡の住居跡について

本遺跡で検出した縄文時代の竪穴住居跡は8軒で、全て後期と晩期に帰属する。内訳は後期が4軒、晩期が4軒である。ただし、11号住は、後期と晩期の両時期にまたがるが、最終期が晩期なので、一応該期に含めておく。最初に後期の住居であるが、検出した4軒の住居のうち単独で検出しているのは2軒である。位置は調査区の東側の8号住、西側の15号住である。出土土器から8号住が加曾利B3式から曾谷式期、15号住が加曾利B3式期に帰属される。調査区の関係で完全な検出には至らなかったものの、平面形が、方形ないしは円形という形状は共通する。また、出土遺物中にも15号住は石棒の破片が1点混入するものの、2軒とも内容的に特異な状況は示していない。しかしながら、同じ加曾利B3式期に帰属する10号、20号住は前述の2軒とは若干違った様相を呈している。2軒は調査区の中央部に位置し、10号住は20号住の内側に入り込んだ状態で検出した。一見すると20号住は10号住を壊して構築しているように見えるが、床はフラットで段差はない。遺構内には多数の柱穴が検出し、10号住の壁の南側から北側に向かって弧状の配置が認められる。また、それに沿うように南東側の20号住の壁柱穴が巡ることから、複数回の拡張に伴う建て替えが想定される。おそらく加曾利B3式期から曾谷式期の短

期間での建て替えと思われる。10号、20号住の出土遺物は、先ほどの8号、15号住とは内容を異にし、通常の土器の他に、釣手土器、注口土器、土製円盤、土偶、耳栓、磨製石斧、大型の打製石斧、石棒の先端部などが出土している。

次に晩期の住居跡であるが、後期同様、東側に2号住と6号住、西側に14号住が位置している。2号住は張り出し部を有する方形の住居、6号住は方形ないしは長方形、14号住も壁の検出はなかったが、おそらく方形を呈していたと考えられる。従って3軒の住居の平面形は共通している。時期は、2号住が、安行2式から3a式期、6号住が安行3a式から3b式期、14号住が安行3b式から前浦式期に帰属される。このことから3軒が時間差を伴いながら営続的に存在していたことが想定される。遺物は、2号住の内容が豊富で、通常の土器の他に完形に近い注口土器や浅鉢、異形台付土器の一部のほか、耳飾は小片も含めて14点と多く、土偶なども出土している。6号住は深鉢、浅鉢、釣手土器の他に耳飾の優品、土偶、異形土器の脚部や完形の石剣などが出土している。14号住は、安行3b式、前浦式、大洞A式を主体とする土器の他に完形の独鈷石が出土している。ただし、特殊な土製品等の出土はみられなかった。最後に問題となるのが11号住である。後期から調査区中央部に位置し、10号住を壊して構築している。遺物は、釣手土器、異形台付土器、異形注口土器(赤彩)、手燭形土製品等の他に耳飾、耳栓、人面付土版、土偶等の土製品、石棒、石剣、石冠等の特殊な石製品が出土している。土器は、曾谷、安行1式から大洞A式まで長期にわたり、土偶も山形、ミミズク、遮光器系の模造品など、各土器型式に沿った内容となっている。

10号・11号・20号住について

厳密な意味では、3軒とも中期の加曾利EIV式の土器から出土がみられるが、まとまった遺物が多量に出土するのは後期の加曾利B式以降からとなる。この段階では11号住で遺構内全面に遺物の分布がみられ、10号、20号住では前述した拡張ラインの壁際に沿った場所に遺物の出土が認められる。また、石

器についても同様の分布状況を示している。安行3a式以降の晩期になると、11号住にその分布が集中し、10号、20号住には該期の遺物出土が認められない。このことから、後期の段階ではある程度の時期差がありながらも、10号、11号、20号住は加曾利B式以降、拡張や建て替えを繰り返しながら存在し、晩期になると11号住のみが残された状況を示している。

3軒の住居の性格を考察するうえで、土偶、耳飾、土製品の出土分布は鍵となる。即ち、10号、20号住中ではこれらの遺物の分布が極めて少ない状況を示しているのに対し、11号住では多量に出土し、土偶については接合関係も認められる。このことから3軒は通常の住居ではなく、何らかの祭祀行為が行われた施設であったと考えられる。また、人面付土版、石棒、石剣、石冠などの出土は祭祀行為が多様であったことを想起させる。

その他の住居と土坑について

本遺跡の縄文時代の住居跡のうち、後期に帰属する8号住、15号住また、該期に並存していたと考えられる10号、20号住には特殊遺物の出土が少ない。それでは、後期には祭祀行為が盛んではなかったのかという点が問題となる。

本遺跡で縄文時代に帰属する土坑は368基であるが、このうち、後期の土坑は252基と68%を占めている。このうち、5基から土偶の手足などのパーツが出土し注目される。これまで土偶祭祀に関しては、接合率の低さや完形のものが少ない点から、祭祀が終了した段階で、その部分品を関係する集落間で持ち帰るといふ説や、埋納、住居内に祀られるなど様々な説が議論されている。本遺跡の場合でもこれに類する祭祀が執り行われていた可能性は考えられる。その後、これらの土坑に祭祀遺物が廃棄された可能性が高い。また、祭祀遺物を伴う土坑は、住居の散漫な空間を埋めるように配置されていた。いずれにしても、出土量は多くないものの、本遺跡の後期段階から土偶祭祀の萌芽が看取され、住居軒数が少ないことと、後期の土坑の多さは一定の補完関係を示していると考えられる。

その様な状況は晩期に入っても受け継がれてい

る。一例として14号住では、安行3b式から大洞A式に資料の充実をみており、遺物の様相は11号住と酷似している。ただし、完形の独鈷石以外、特殊遺物の出土が見られないということが相違点である。では、独鈷石を使用した祭祀以外は行わなかったのかということに関しては疑問である。本遺構のすぐ西側には241号土坑が所在する。この土坑は土製円盤、耳栓、耳飾、人面付土版、土偶などの特殊遺物が豊富であると同時に、土器型式は安行3b式を主体とする。前述の後期同様、祭祀が終了した遺物を241号土坑に廃棄した可能性が高く、14号住と241号土坑は補完関係にあると考えられる。

特殊な土坑～241号土坑について～

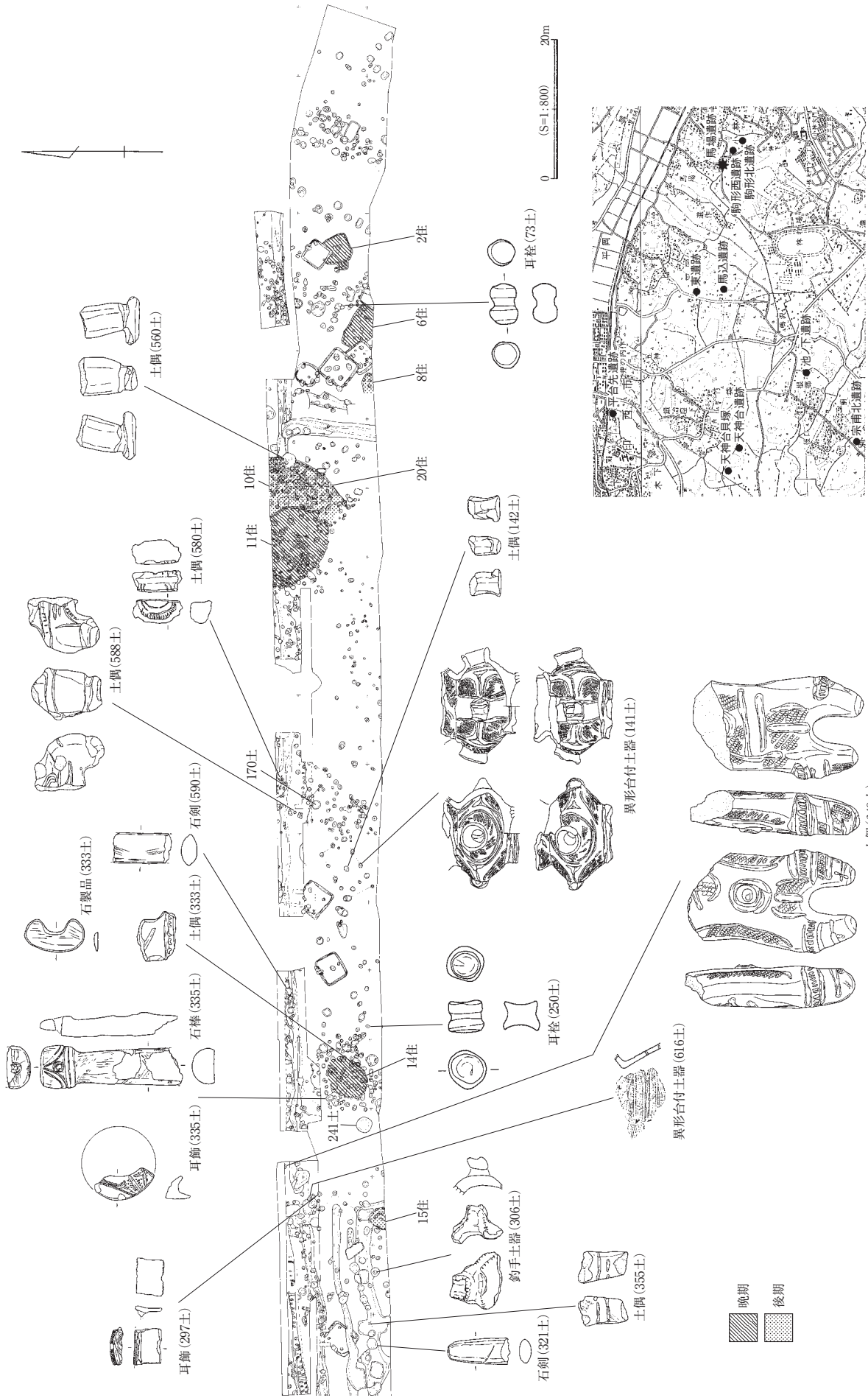
241号土坑は、長径2.37m、短径2.27mの円形を呈し、壁の立ち上がりは垂直である。深さは最深部で5.46mを測る。また、覆土は確認面から底面まで、ヤマトシジミを主体とする貝に獣骨が混じる暗褐色土である。遺構の性格については、壁の状況が普段から上り下りできるものではなく、深さと規模から推して、井戸とみるのが適切であろうと考えている。では、その期間が問題となる。241号土坑の土器は、加曾利EIV式から出土がみられる。その後、土器型式の流れは称名寺式、堀之内式、加曾利B式、曾谷式と連綿と続くが、出土量は少ない。次の安行1式から安行3b式では出土量も段違いに多くなり、完形に近い土器や祭祀関係の特殊な遺物も含まれるようになる。この時点が井戸としての機能が終了するひとつの画期ではないかと考えられる。通常、遺物が多く含まれる時期が遺構の帰属と捉えるが、井戸としてみた場合、生活に切り離すことのできない水を得るため、それなりの深さを保ち、枯渇した場合はさらに掘り下げる等のメンテナンスは行ったであろう。従って出土量の少ない時期までが井戸としての機能を有していたものと考えたい。

また、土器・特殊遺物のほかにも狩猟、漁労に関する骨角器の出土がみられ、また貝輪、貝玉などの装身具も出土している。主体であるヤマトシジミは食用と考えられるが、貝輪などは未製品が多い。つまり、安行1式以降は、祭祀的な遺物の他に日用品

も投棄する場であったと考えられる。ただし、安行3b式の完形に近い注口土器は注意しなければならない。覆土中層から正位に置かれたような出土状態を示しており、口縁部から胴部の欠損は意図的に打ち欠いたものと考えられる。同様の出土例は佐倉市井野長割遺跡第8次調査の28号土坑でも確認され、やはり底部付近に打ち欠いた痕跡が認められる。これを祭祀行為に使用したものの廃棄とみるか、井戸に関連する祭祀行為とみるかは今後の課題となろう。

縄文時代における馬場遺跡の集落構造について

調査区中央に位置する10号、11号、20号住の長径は、10号住で6.4m、11号住が8m、20号住が11mを測る。いずれも調査区外の範囲を含めれば、推定で10m超の大きさとなる「大形建物跡」と捉えられる。これ以外の住居は東西の端部に位置しており、中心となる3軒を取り囲むような配置状況を示し、さらに大形建物以外には住居間の重複関係がないことから、本遺跡は、後・晩期の環状集落と位置づけられる。また、その性格は大形建物跡を祭祀の核とし、周辺の土坑群と有機的に結びつき、ひとつの祭祀場を形成していたと考えられる。241号土坑には、食料となる貝類が出土しているが、量的には後期・晩期にわたって生活できる量ではない。おそらく、祭祀にあたっての食料の残骸ではないかと考える。さらに獣骨の他にも骨角器等の狩猟、漁労具が投棄されるが、赤彩されたものも含まれることから実用品ではなかった可能性もある。これまで、該期の住居と土坑を中心に述べてきたが、3軒の大形建物跡と東西に位置する住居間には、多量の土器群と特殊遺物が包含層として存在していた。中世以降の土地利用で攪乱を受けているが、出土遺物はこれまでの遺構内で指摘してきた内容と大差ない。このことから、使用した遺物を単純に周辺に遺棄したのではなく、日用品や祭祀関係の廃棄の場所も集落内のルールに従って形成されていたことが考えられる。

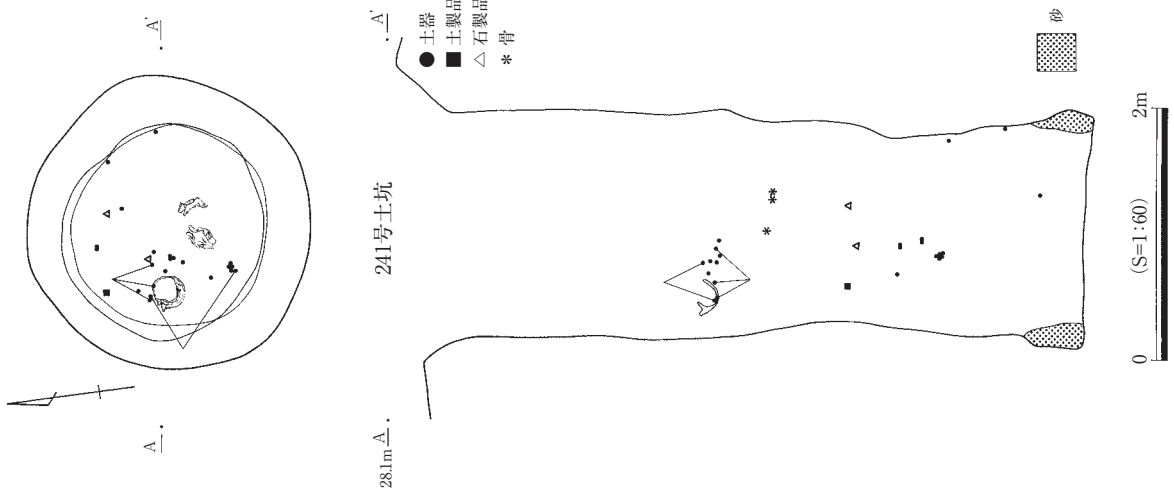


第1図 馬場遺跡と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

第2図 馬場遺跡遺構配置及び土坑内特殊遺物出土分布図



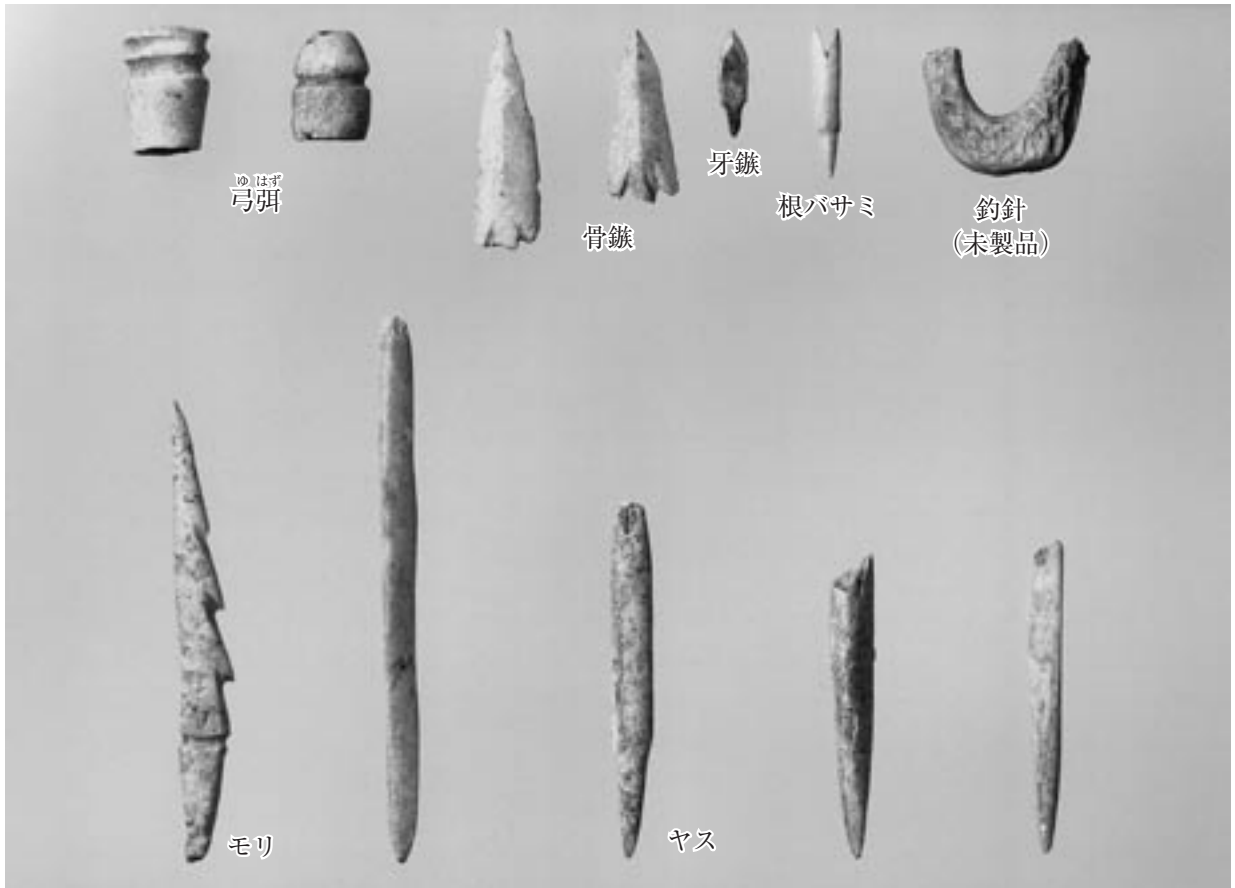
出土した様々な土偶



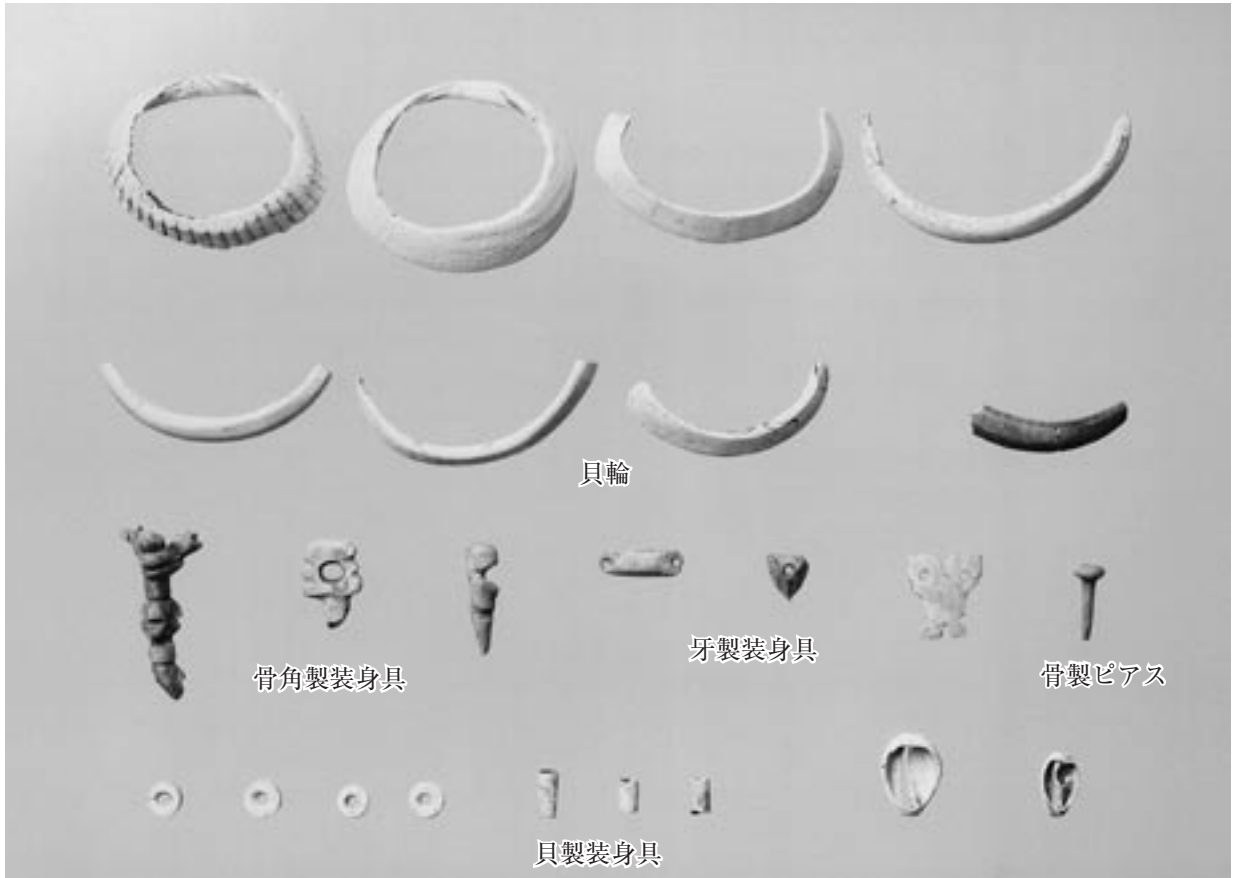
241号土坑

馬場遺跡で取り扱う主な土器型式

時期	土器型式	年代	主な出土地
早期	熱糸文系	9,000年前	関東
	沈線文系	8,000年前	関東
前期	関山式	6,500年前	関東
中期	加曾利E式	5,000年前	関東
	称名寺式	4,500年前	関東
後期	堀之内式	4,300年前	関東
	加曾利B式	3,800年前	関東
	曾谷式	3,500年前	関東
	安行I式	3,600年前	関東
晚期	安行3a式	3,300年前	関東
	安行3b式	3,200年前	関東
	前浦式	2,900年前	関東
	千網式	2,800年前	関東
	土器型式		主な出土地
	大洞BC式		東北地方
	大洞C2式		東北地方
	大洞A式		東北地方



骨角器 (241号土坑出土)



貝輪・骨角製装身具・牙製装身具・貝製装身具 (241号土坑出土)